

官 營 生 野 鉦 山 の 先 覺 ・ 朝 倉 盛 明

新エネルギー財団 吉田 國 夫

1. まえがき

朝倉盛明。名前は“もりあき”と読む。彼を素通りにして官營生野鉦山を語ることはできない。生野は、明治元年（1868）12月、維新政府による官行第1号のモデル・マインとしてスタートした。鉦山の近代化を指導した技術者はお雇い外国人第1号のフランス人、コワネ（Francisque Coignet, 1835～1902）である。この時、幕末に薩摩藩留学生の一人としてロンドン、パリに渡り、鉦山学を修業した朝倉が、新政府に出仕し、コワネの通辨を兼ねて生野入りをした。

爾来、彼は生野の最高責任者として鉦山の近代化に盡力した。明治前期の生野鉦山の歴史は、そのまゝ、朝倉盛明の奮闘史であったと云っても過言ではない。



御料局生野支廳長時代の朝倉盛明

しかし、彼が生野を去るに当たっての経緯や其後の動向は杳として定かではなかった。犬塚孝明氏の名著“薩摩藩英國留学生”（中公新書）もこれに触れ、『明治22年4月1日をもって、生野鉦山が佐渡鉦山と共に皇室財産に編入され、宮内省御料局の所轄となるに及んで、朝倉も山を下りねばならなくなった。退官後の朝倉の事績については、その没年と同じく全く不明である。』と述べている。

筆者は、朝倉が生野退官に至った背景を、鉦業発達史の観点から究明するとともに、幕末、維新时期を通じての彼の多彩な生涯を紹介する。

2. 幕末期の朝倉盛明

朝倉盛明は、天保十四年（1843）十一月二十三日（陽暦、1844年1月12日）薩摩藩士田中伊平衛（

別名、笑賀）の二男として城下、上の園（現、鹿児島市上之園町）に生れた。本名を静洲と云い、別名を盛高、幸齋とも呼んだ。また、元治二年（1865）渡英に当たって、藩主の命により、朝倉と改姓し、省吾（静吾ともいう）と変名した。

朝倉は、幼少より俊才をもって知られ、嘉永五年（1852）、数え10才で藩医萬膳玄正に医術を学んだ。其後、安政年間、石河確太郎に師事して蘭学を修め、さらに万延元年（1860）、選ばれて長崎に赴き、松本良順塾に入門した。ここで、ポンベ（Pompe van Meerdervoort, 1829～1908）に蘭学を専修するなど、幕末、洋学の爛熟期において、彼は将来の指導者となるべきエリート・コースで研さんを積んだ。

文久二年（1862）藩の海軍建設にあたり、帰藩を命ぜられ、天佑丸（船長・五代友厚）に乗船し、同三年（1863）薩英戦争に従軍した。

元治元年（1864）薩摩藩は、陸海軍の教育を圖るために開成所を創設すると同時に、朝倉は句読師となったが、翌二年（1865）、五代友厚らの発案により、いわゆる「薩摩藩英國留学生」に選ばれ、幕府の禁令を破って、ひそかにロンドンに学んだ。この留学生のなかから、森有礼（文部大臣）、松村淳藏（海軍兵学校長）、吉田清成（外務大輔）ら、黎明期の明治政府で近代日本の建設に盡力した人材が輩出した。

渡英後の朝倉は、教師のもとで英語を専修し、同年十二月、五代の指示により中村博愛（外務大書記官、貴族院議員歴任、1843～1902）とともにフランスに渡った。パリにおいては、モンブラン（Charles Comte de Montblanc）（1832～93）の斡旋によりフランス語、殖産、鉦山学を修めた。また慶応三年（1867）パリ万国博覧会には、薩摩藩出品の説明にあたるほか、ベルギーとの合弁商社契約には通訳としても活躍した。博覧会終了後、同年七月帰国して再び開成所の職に就いた。其後、モンブランが薩摩藩の政治顧問格となり、鉦山技師コワネとともに来日するに当たり、朝倉は五代と上海にこれを迎え、十一月鹿児島に帰着した。

3. 明治政府に出仕

慶応四年（1868）、新政府が樹立されるに及んで、朝倉は、4月外國事務局御用掛を拜命して通譯として出仕し、同年、明治元年十月、会計官鉦山司判事試補となっ

た。さらに十二月、生野銀山の官行にあたって、コワネの通訳を兼ねて同鉱山在勤となり、こゝに彼の生野生活が始まった。爾來、工部省鉱山寮生野支庁長の重責を担い、コワネの建議に基き、フランスから技術者を雇傭し、金銀鉱の処理に樽混汞法を採用するほか、貨物運搬道路を新設するなど、鉱山事業の発展に盡した。これらの状況については、朝倉が報告した「生野銀山行業ノ景況」などに詳しい。

朝倉が心血を注いだ生野鉱山の拡張計画は、明治9年(1876)5月、工部卿参議伊藤博文の臨席のもとで盛大な落成式が行なわれた。

其後、官営鉱山は、ほとんど明治18年(1885)の工部省の廃止前に民営に移った。しかし、生野は佐渡金山とともに引続き農商務省が所管することとなり、さらに翌年、国の財政政策に基づき、正貨準備、蓄積の必要性から大蔵省が管理することになった。朝倉はその間、鉱山助、工部大技長、生野鉱山局長、大蔵一等技師を歴任したが、ひろく職員、住民から“長官”と呼ばれて崇敬を集めた。

4. 御料局生野支廳長

大蔵省が統轄した生野鉱山は、明治21年(1888)12月、大蔵大臣松方正義の報告にもとづき、皇室財産に編入することが決定した。翌22年(1889)4月1日、宮内省に移管され、朝倉は生野支廳長を命ぜられ、引続き鉱山の管理、経営に当ることになった。

宮内省

明治廿二年三月三十一日

御料局生野支廳長ヲ命ス

御料局理事朝倉盛明

生野鉱山を掌理した御料局は、さらに生産の増加を圖るため、鉱山備林を設けて鉱業用材の確保を圖るとともに、新進気鋭の技術者を懇請することになった。

こゝに登場、生野鉱山に赴任したのが大島道太郎(1860-1921)である。大島はドイツ・フライベルク大学で最新の西欧採鉱冶金技術を習得し、明治15年(1882)帰朝後、小眞木、白根、尾太、細倉鉱山などで矢継ぎ早に近代化を推進・指導してきた鉱山技師である。

彼は、着任した翌23年(1890)8月、鉱山近代化のための「生野鉱山鉱業改良意見書」を朝倉支廳長あてに提出した。その前書にあたる一部を載せよう。

敢テ自ラ信ズル所ヲ具述シ、大ニ改良ヲ加ヘント

欲スル所以ナリ。書中議スル所、事、頗ル多端ニ涉リ、論或ハ急劇ニ似タルモノアリ。蓋シ生ノ将来当鉱山ニ期スル所甚ダ大ニシテ且ツ遺憾トスル所ノモノモ亦甚ダ大キニ原因ス。若シ夫レ興業費額ノ如キニ至ツテハ、須ラク坑業計画ノ如何ニヨツテ其多寡ヲ定ムベシ。豫メ資金ノ額ヲ定メ而シテ後計画ヲ議スル如キハ經濟ノ本旨ニアラザルベシ。伏シテ貴下ノ明決ヲ乞フ 頓首敬白

彼の意見書は、現行の方法を記述し、その欠点を挙げ、さらに改良の方法を詳説し、改良後の損益計算に及んだものであった。例えば、現行方法の欠点のなかで、先づ坑業に触れ、

前十年間營業上利益ノ僅少ナリシヲ以テ勢イ目前ノ營利ニ汲マン、永遠ノ工事ヲ企図スルニ違アラザリシ

などと、秋霜烈日な意見を具申している。また、改良の方法として、丸山疏水坑道、太盛新堅坑の開さく、混汞法に代る濕式製鍊法の採用などを挙げ、最後にこれに要する興業費、376,470円に対して、一週年の産出高、金銀銅合計547,696円、差引純益171,226円を算定し、資本償還、利子年1割として、少くとも856,000円を投下する価値ありとの意見であった。当時、生野支廳には大島道太郎をはじめ、工部大学校出身の栗本廉、東京大学を終えた山田文太郎のほか、付屬大阪製鍊所に石田八弥(工部大学)、西山省吾(東京大学)ら官界の新進技術者が、生野近代化の頭脳として在勤していた。

5. 生野支廳興業費、益金年割額変更の件

大島技師の鉱山改革の意見書の提出もあって、御料当局においては、佐渡金山とともに、臨時興業費を投下して、事業の拡張に努め、収入の増加を圖っていた。御料局は生野支廳が上申した拡張計画に対して、24年(1891)2月、これを裁定した。その事業は金鹿瀬坑下部の開発と疏水坑の開さく、製鍊における汰鉱器械の改良などであった。すなわち、興業費60万円を投じ、24年度に着手、27年度竣工とし、益金は25年度10万円、26年度12万円、27、28年度はさらに夫々1万円を加え、27年度以降17万円(太盛山、金香瀬山の金銀鉱より10万円、金香瀬の銅による7万円)を目論むものであった。しかし、この計画は、着手2年度において、不運にも変更せざるを得なかった。主な理由は金香瀬堅坑開さく中の大湧水と太盛山堅坑の出水による工事竣工の遅延である。そのうえ、アメリカから調達した「ハンチングトン式」磨鉱機的能力不足によるものなどが挙げられる。この磨鉱機はすでに、21年5月、佐渡鉱山が粉碎と混汞法を併行するために採用した当時の新鋭器械であった。発明者の触れ込みでは、ミル、1ヶ月の鉱石粉碎能力は、2,700トンであったが、支廳

はこれを2,000トンとして計画した。しかし、操業段階では1,000トンに留まり、しかも竣工予定も2年おくれの29年度に計画を変更しなければならなかった。そのため、本省が裁定した年度益金額、26年度12万円に対して6万円を見込むに留まることになったものである。

このような事態を招来したため、朝倉は25年(1892)11月、御料局長岩村通俊宛に興業費、益金年割額の変更を稟請した。この改正案は認められることになったが、12月28日付、彼は土方久元宮内大臣から次のような文書を受けた。

昨廿四年二月御料局長へ請議シタル生野鉦山改良事業ノ計画枝梧シ、大ニ収支ノ豫算等ヲ変更スルニ至リシハ、主トシテ豫知スベカラザル故障ニ原因スト雖モ、又職務上ノ失錯ナシトセズ。因テ譴責ス

朝倉が生野に入山して四半世紀目に受けた屈辱である。鉦山では、すでに大島道太郎をはじめ新進の学士が活躍し、支廳付属の大阪製錬所も斬新な設備をもって稼働していた。また当時、民間鉦山が漸く勃興の機運にあり、熟練鉦夫の争奪が激しく、生野を去る鉦夫が後を絶たなかった。こゝに至って朝倉は、最早、支廳長としての使命も終わったとして病気を理由に宮内大臣宛、辞職願を提出した。彼が生野鉦山の生活に終止符を打ったのは明治26年(1893)4月28日である。その日、明治元年以降二十余年間に亘り、終始生野鉦山の業務に勉励した朝倉に、思召をもって、銀盃一組が下賜された。退官時の位勲は正五位勲四等であった。彼は退官と同時に大阪市江戸堀に転居し、同35年(1902)京都に移ったが、再び生野を訪れることがなかったという。洛中の御所近く、今出川に移った朝倉は、一切の世事を去り、ひたすら先祖の供養に勤め、清掃と散歩を楽しみ、京都大学に学ぶ嗣子盛彦の成長を見守りながら悠々自適の生活を送った。

彼は大正13年(1925)、持病の胃腸を患い、1月24日この世を去った。行年82才。生涯、正直をモットーに、誠の心を貫き通した朝倉にふさわしく、戒名を「誠心院貫譽実道明德居士」と云う。いま彼は、吉田山に近い百万遍知恩寺にある朝倉家の墓に眠っている。今年が丁度、朝倉盛明没後60年に当たる。

謝辞

この発表に当り、朝倉家、宮内庁書陵部、犬塚孝明氏、高橋邦太郎氏、西堀昭氏、釣洋一氏、森重孝氏、藤原寅勝氏らに御指導と御協力を戴いた。こゝに深く感謝の意を表したい。

朝倉盛明略歴

天保14年(1843)11月	鹿児島城下上の園で出生
万延元年(1860)5月	長崎に遊学、蘭学修業
文久2年(1862)	帰藩、天佑丸乗組
〃 3年(1863)7月	薩英戦争に従軍
元治元年(1864)6月	開成所句讀師
〃 2年(1865)3月	薩藩留学生としてロンドンに出発
〃 〃 12月	フランス遊学、鉦山学修業
慶応3年(1867)7月	帰國、開成所訓導師
〃 4年(1868)4月	外國事務局御用掛
明治元年(1868)10月	会計官鉦山司判事試補 生野鉦山在勤
2年(1869)8月	鉦山司判事
3年(1870)12月	工部省出仕
4年(1871)8月	鉦山權助
5年(1872)4月	鉦山助
10年(1877)1月	工部權大書記官
12年(1879)12月	工部權大技長
15年(1882)6月	工部大技長
16年(1883)9月	生野鉦山局長
19年(1886)1月	大藏一等技師 生野工業所長
22年(1889)3月	御料局理事 生野支廳長
26年(1893)4月	依願免本官 大阪へ転居
35年(1902)	京都在住
大正13年(1925)1月	死去(行年82才)

参考文献

1. 薩摩藩英國留学生 中公新書 犬塚孝明 昭.47
2. 生野史 校補鉦業編 生野町役場 昭.52
3. 工部省沿革報告 大藏省 明.21
4. 帝室林野局五十年史 帝室林野局 昭.14
5. 生野鉦山鉦業改良意見書 大島道太郎 日本鉦業史料集第一期明治編 昭.56
6. 生野銀山行業ノ景況 朝倉盛明 明.9
7. 薩摩医人群像 春苑堂書店 森重孝 昭.51
8. 明治工業史 鉦業編 日本工学会 昭.5
9. 生野鉦山学校 仏蘭西学研究 高橋邦太郎 昭.50